
靈魂！

花宮月弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靈魂！

【Nコード】

N2122Y

【作者名】

花宮月弥

【あらすじ】

「幽霊ってほんとにいると思う？」

「んー……」。

でも、『いる』って言うたら世界中大パニックになるよね」

中学2年生の少女、鈴堂新菜とその“守護霊”、蒼柳。どうしようもない凸凹コンビが世界を救うかも？

“ 霊魂使い ” を名乗る人間たち。

“ 守護霊 ” を名乗る霊魂たち。

そして “ 悪霊 ” と呼ばれる霊魂。

ゆるゆるなラブ（？）アクション！

（ホラーというジャンルに入るのかもしれませんが）

プロローグ（前書き）

こんにちは！

花宮、はじめての投稿になります。

お目を通してくださり、本当にありがとうございます。

「靈魂！」は、完全にわたしの好みの話となってしまいました。

でも、とても厚かましいお願いではありますが、最後までおつきあいいただけたら嬉しいです。

拙いながらも少しずつ頑張っていきたいと思います。
どうぞよろしくお願いいたします。

プロローグ

【プロローグ】

クーラーは快適な温度を保っているはずなのに、じつとりと汗をかいている。

「あ、あたしじゃないよ!」

しかも、うすら寒い。

「（別にニイナを疑っているわけじゃない。この件にニイナが関わっているのだろう、と言っているのだ。）」

よく聞いていないと聞き漏らしてしまいそうな程、微かな声。

ささやくように、心地よく響くはずのその声は、今の新菜にとって
は恐怖ではない。

事件は一昨日起こった。

ある男のルール違反を目撃した新菜は、すぐに告げ口をしようとしたが、できなかったのだ。

それは、その男と同罪だということを指す。

「うう……」

「（ニイナは嘘が下手なのだから、隠す必要などない。何度そう言わせるつもりだ？）」

切れ長の鋭い眼光を放つ瞳が新菜を見据える。

新菜はあわあわ、と抵抗を試みたが、結局何もできずに、うなだれた。

「ソウリユウはたまに鋭すぎてイヤ。」

新菜の呟きを聞いて、蒼柳は笑みを深める。

新菜はふと顔を上げると、観念したようにバンザイした。

「ミツがやったんだよ、あの事件は。」

「（ミツ……？）」

「そう、オオサキミツ。あたしと同じ学校の先輩で、あたしの直属の上司。」

でもね、事件を起してる時のミツは『やらされてる』みたいな感じだったから、かわいそうで。」

大崎密はルール違反をするような男ではない。

正義感が強すぎる故に他の人との折り合いがつかず、最終的に新菜とペアを組むことになったという経緯まで持つ。

そんな男が簡単にルール違反をするだろうか。

「ま。バレちゃったんだから、ソウリユウも一緒に考えてよね。」
「（無論だ。）」

黒目がちの大きな目をくしゃり、として笑うと蒼流もふっ、と笑い声をもらす。

「（私はニイナの“守護霊”だからな）」

これは少女、鈴堂新菜 リンドウニイナ と、その“守護霊”、蒼柳の話である。

1話 お仕事（前書き）

説明がだらだらと続いてしまいまして、とても読みにくくなってしまいました。

ごめんなさい。

長くなりすぎないように、一旦はここで切ることになりました。

お気づきの点があれば、ご指摘くださると幸いです。

1話 お仕事

靈魂使い。

そして、守護靈。

その存在がいつから出現していたのか。

それは定かではない。

しかし「全靈会」こと「全国靈魂協会」が発足したのは戦後すぐだった。

……らしい。

新菜はそびえ立つ古い洋館を、怪訝な顔で見上げた。

古ぼけた木製の立て札に、申し訳なさそうな字で 全国靈魂協会本部 と書いてあったり。

まったく手入れされていない庭は、カラスが住み着くほど深い雑木林が出来上がっていたり。

そのせいで、建物に影が射して年中暗くジメジメした雰囲気をもっているという。

いつ見てもおどろおどろしいこの場所。

新菜は軽いため息を吐いてから、錆び付いた鉄製の、自分の身長の2、3倍はあろうかという門に手をかけた。

全国霊魂協会本部。

それは、この国を見えない存在から救うために設立された、あまり陽の目を見ない組織である。

一応政府公認だが、それを掲げるわけでもなくひっそりと活動している。

しかし、仕事は結構な数入ってくるので、組織として成り立っているというわけだ。

なぜ、全霊会は大々的に活動しないのか。

それは、幽霊の類いが存在することを国が認めてしまえば、大きな混乱を招くことが予想されるからだ。

幽霊を信じていない人が多い中、わざわざ幽霊の存在を公表して「巻き込んで」しまうことをさけるため、全霊会でも「霊魂の存在を明かしてはならない」という掟があるくらいだ。

新菜は重い足取りで歩みを進める。

密のことが頭から離れない。

密は本当に良い人なのだ。

変なところもあるけれど、気配りができて、その上かなりの美男子で。

いや、ここではカツコイイとか関係ないけど。

新菜はぐるぐると、そんなことを考えながらインターホンを押した。

『はい、こちらー全国霊魂協会本部でございます。』

「碧さん、ご苦労様です。鈴堂です。」

『はいはい、ご苦労様ー。今、霊魂用のプロテクト外しますねー。』

「お願いします。」

隣には蒼柳がいる。

悪霊の襲来を危惧して協会本部には強いプロテクトが施されているから、解除してもらわないと蒼柳だけ中には入れない。

「いつもここで時間食っちゃってごめんね。」

「（何故謝る。気にすることでもないだろう。）」

「だって、ランクA以上の人なら自分でプロテクト解除ができるんだよ？」

「（別に。待つのは嫌いでない。気にするな。）」

ランク制度。

これはつい10年ほど前からはじまった制度で、依頼で殉職者をださないための工夫だ。

ランクは全部で6つある。

上のランクから命に関わる仕事を与えられることが増えていく。と、いうことは必然的に上のランクにいくほど、強い霊魂使いとい

うことになり。

S・A・B・C・D・Eとランクがあるうち、新菜はC。

つまり新菜個人に与えられる仕事は悪霊とは関わりのない、「自爆霊との会話」レベルのものだけだ。

ぱっ、としない自分と蒼柳。

蒼柳は靈魂のランクでは最高を超越するS+であり、本来ならランクに見合った靈魂使いの守護霊になるのがベストなのに。

ふっと、体を感じていた抵抗がなくなりインターホンから間延びした碧の声がした。

『一時的に解除しましたー。15秒後に再びプロテクトされるので、早めに入ってくださいーい。』

もちろん、碧の言葉を最後まで聞くことなく、新菜と蒼柳は屋敷の内部へと滑り込んだ。

鉄製の両開きのドアを開けると、クーラーの風が心地よく体にあたる。

ふっと視線をあげると、目の前に見慣れた女の人がちょこんと受付カウンターに座っていた。

「碧さん、こんにちは。」

「鈴堂ー。ずーいぶんと久しぶりじゃないのー。」

「はい、すいません。」

「あらやだー。別に、責めてるわけじゃないのよー？」

受付嬢の有栖川碧はエキゾチックな美貌の持ち主で、年齢は不詳だ。
碧の横にはエキセントリックな格好をした守護霊が浮いている。

「ニールズさんもこんにちは。」

「（H A H A H A、コンニチハ！ソチラノカタモコンニチハ！）」

「（わ、私か？ こ、こんにちは。）」

生前、道化師だったらしい。

蒼柳はクールな顔を横に引き延ばして無理矢理笑顔を作った。

- - -

協会内部は華やかだ。

中世の貴族の屋敷を連想させる造りになっていて、老若男女、色々な人たちが何かの手続きやら談笑やらをしている。

ここでは、周りがみんな靈魂使いだということもあって、人目を気にせずにのびのびと出来る。

同じ理由で、離れにある協会の宿泊施設はいつも満員状態だ。

「あの、碧さん、ミツ来てませんか？」

「大崎くん？ ああー、来てたと思うわよー？」

「ホントですか！ ありがとうございます！」

瞬間、駆け出す。

傷むほど染められた金髪を探して。

「（待て、ニイナ。）」

その背にストップがかかる。

蒼柳を振り返った新菜は余裕のない顔をしていた。

「（だめだろう、闇雲にこのような広い建物の中を探しても。）」

はた、と止まってあは、と笑う。

「そうだった、そうだった！」

新菜はそっと目を閉じると、集中する。

気持ちを沈めると、密の少しずつ霊力を感じるようになってきた。

そして暖かい、包み込むような密の靈力を、確かに察知した。

「感じた！ 2階のずっと奥。ここは…」

「（会長室、だな。）」

会長室にどうして密が？

やっぱりあのことがバレてしまつて…

血の気が引いた新菜は会長室を目指して駆け出す。

後ろから蒼柳が止めるのも聞かないで、弾丸のごとく会長室に突入した新菜は、息をつく間もなくまくし立てた。

「会長っ！

ミツは確かに他の靈魂を殺してました！

だけど、とっても苦しそうだったんです、すごく苦しそうな顔をしていたんです！

だから何か理由があると思うんです！

お願いします、ミツを処罰しないでくださいっ！」

言い終わって肩で息をしていると、空気がしらけていることに気づく。

苦笑した会長、怪訝な顔をした会長の秘書・京子、そして呆けた顔をした密と、それぞれ視線があつて新菜は混乱した。

「あれ？ あれれ？」

「鈴堂さん、ノックをしてから部屋に入るくらいの礼儀は最低限守って頂けますか。」

「え、と。あの？」

「新菜ちゃん、ちょっと落ち着こうか。こちらに來なさい。」

ピシリしたダークスーツを身にまとい、髪をしつかり結びあげた上に黒ぶちメガネ、という出で立ちの京子に痛いほどの視線を浴びながら、新菜は会長の方へ歩いて行く。

密は確かに他の靈魂使いを殺していた。

靈魂の断末魔がまだ自分の頭の中に響いている。

あれは夢なんかじゃなかったはずで。

でも、ちょうど蒼柳とは離れていたから確証もなく。

新菜の頭の中は絡まりに絡まっていた。

「新菜ちゃん、まず新菜ちゃんが見たものを話してくれるかな？」

心暖まる優しい声色の会長は、灰色の長髪を緩く横に流している。片眼鏡は女性的な美しさをもつ会長をより神秘的にしている。

その微笑に、新菜は思わずぼーっとしてしまった。

「（お前の話を聞かせろと言っている。さっさとせぬか！）」

「うわ、あ、はい！！」

会長の靈魂、帥に怒鳴られた新菜は我に返って、姿勢を整える。

帥は幼女のような姿をしているが、遙か彼方昔の靈魂で、その力は想像を絶する。

着ている服も平安貴族風であり、どこか他の靈魂とは違ったものを感じさせる。

新菜は帥に深く頭を下げたから、ぽつりぽつりと言葉を紡いだ。

「あの、一昨日、お仕事を頂いて自爆霊さんとお話してたんです。そしたら、路地にミツが入っていったのが見えて、何してるんだろうつて思ってたんですけど、自爆霊さんのお話を続けたんです。

でも、次の瞬間にすごい悲鳴が聞こえて、でも人間の声じゃないっていうのはなんとなくわかって、急いで駆けつけたら、苦しい顔したミツが立ってて、そのあと靈魂殺しがあったって言うから、それはミツなんじゃないかって思ったんです。」

新菜の説明に全員が深いため息をつく。
密はしらけた目で新菜を見た。

「俺の隣にローザはいたか？」

「え、あ、見えなかった。」

「ローザ、あの時俺の側にいたか？」

ふいっと視線をあげるとイブニングドレスをまとったグラマーな靈

魂が、前髪をかき揚げながら答えた。

「（ニーナの霊魂と一緒にだったわよ。）」

「霊魂なしで、どうやって霊魂を殺すんだよ。」

「……ああ〜！」

あの時、確かに霊魂同士でつもる話があるから、ということまで、蒼柳もどこかへ行っていたのだ。

「じゃあ、ミツじゃないの……？」

「俺じゃなくて悪かったな。」

「本当に！？ 本当の本当？」

「しつこい。」

新菜は心が軽くなって、その場で大泣きしてしまった。
密はあわてて、なだめにかかる。

「いやあ、本当に微笑ましいね。新菜ちゃんは密くんを守ろうとしたんだね。」

「（ふむ。いいペアじゃないか。）」

密と新菜のペアは、学生同士のペアでなかなか舵取りが難しいのだ。本分は学校でありつつ、協会にも籍をおいている二人は何よりも動きづらい。

その中でよく、絆をつくったものだと感心する。
それは密の誰より強い正義感と、新菜の素直さが織り成すことなの
だろう。

朗らかな雰囲気になりつつあったその場に、京子の咳払いが響く。
新菜は泣き止み、密はぐっと引き締まった顔になり、会長は手を組
んで笑顔を引っ込めた。

「（失礼します……って何だ、この雰囲気？）」

今更入ってきた蒼柳は、目を丸くする。

そんな蒼柳に、会長は新菜の隣に行くように命じた。

「ちょうどいい。蒼柳くんや新菜ちゃんにもきいてもらいたい話だ。
今日密くんに来てもらったのも、この話をするためだった。」

緊張が走る。

京子はカツカツ、とヒールを鳴らしながらドアの側にたつと、誰に
も聞かれないようにプロテクトをかけた。

「話というのは他でもない、霊魂殺害事件の話だよ。」

これは実は、前々からあった話で新菜ちゃんが立ち合ってしまった
事件で正に20件目。

その事実を協会は隠してきたわけだけど、もう隠しきれなくなっ

しまった。」

「え、どうして隠してたんですか？」

「（よく考えてからものを言え、馬鹿者。

協会に携わるもの全てが知ったら混乱になり、情報が尾びれつきで流出する。

そんなことになったら、犯人は捕まりにくくなるだろ。」

「な、なるほどー！」

「そう。でも、もう隠しきれない。

そこで状況が悪化する前に片付けてしまおうとしたんだ。」

会長の話はこうだ。

おととい、犯人を捕まえるべく、密がはぐれた靈魂の魂を察知して向かったところ、時既に遅く、大きな黒い塊が靈魂を食い殺している最中だったらしい。

犯人が人間だと思っていた密は靈魂相手に何もできず、ただ靈魂が喰われるのを見ていることしか出来なかった。

「危ない、それ、その変な黒いのにみつかったら、ミツは殺された！」

叫ぶように言って、新菜は蜜を睨んだ。

「普通ローザさんを連れていくでしょう！」

「（あの時、密はあたしに気を使ってくれたんだ。霊魂が集まる機会なんて、そんなにないからな。）」

「だって、それで、もし」

あとは言葉が続かなかった。

震える肩を押さえて、うつむく。

そんな新菜の肩に手を置いて、密はなだめるように言った。

「ごめん、ニーナ。
もう絶対しない。」

新菜は人の命に過敏に反応する。

密の体温を感じて落ち着きを取り戻してきた新菜を横目に見つつ、会長は話を続けた。

「今回、密くんにはちょっと危険な仕事をしてもらうことになる。
黒い霊魂の始末だ。」
「はっ！？」

抗議しようと一歩踏み出した新菜に、京子の主語霊——袴姿で後ろ髪を一本に縛り、凜としたたたずまいの女、が日本刀を突きつけた。

「（動いたら斬る）」

「声も出せないようにしておきました。」

やりすぎの京子に苦笑しつつも、会長は何も言わない。

「わかってるよ。そんな危険なこと、密にだけ任せるなっって言いたいんでしょ？」

声の出せない新菜は首を思い切り縦にふった。

「ん。じゃあ、こうしようよ。」

今回の任務は密くんと新菜ちゃん、この二人が一緒にいる時にのみ行うことができる。

これでいい？」

何の文句もありません！

新菜は感謝の気持ちをこめて何度も頷いた。

向こう見ずの新菜に、蒼柳も密も、思い思いのため息を吐く。

Sランク級の仕事をCランクの新菜が引き受ける。

そんな大変な事態に気づいていないのは、新菜ただ一人だった。

第1話 終

1話 お仕事（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！

また、よろしければよろしくお願いします。

お気づきの点があれば、ご指摘くださると幸いです。

幕間 あの子（前書き）

次のお話からの布石となる短いストーリー…というより、やりとりです。

説明不足、かもしれませんが、よろしくお願いします！

幕間 あの子

周りの音が完全にシャットダウンされた部屋の中。

会長の仕事机の上に3?の厚さになった書類を置きながら、京子が聞いた。

「良かったですか」

「ん、何が？」

たった今持つてこられた書類に軽く目を通しつつ、パソコンのキーをたたく。

「あの子、です。」

「新菜ちゃんかな？」

わかっているくせに。

一見、温厚で人畜無害な人間に見えるがとんでもない。

京子は知っている。

この男、アラベル・フォン・サクタ全霊会会長が時に冷酷であり、また残虐でもあることを。

「あの子、死にますよ？」

言った瞬間会長が嬉しそうな顔をした。
にやり、と。
笑みが深まる。

「あの子には見込みがあるからね。
それに密くん。あの子と一緒にいれば平気だと思うよ？
Sからランク上げてはないけど、本当は“騎士団”にだって入れ
る実力なんだよ。」

「騎士団……。
S+の中でも選りすぐりのメンバー、今は5人しかいませんね。」

そう、と言って会長は椅子に体を預けた。

「密くんは実力はピカ一なんだけど、ちょっと正義感が強すぎて+
をあげるにはリスクが高いんだよねえ。」

「確かにそうですね。」
「協会に牙を剥かれたら厄介だし。」

京子の強い視線を感じて会長は視線をあげる。

「ん？」

「鈴堂新菜は何者なのですか。」

新菜のランクはC。
標準より、やや下という具合だ。

しかし、その守護霊である蒼柳のランクはS+。

守護霊制では靈魂自身が、自分が守るべき“主”を選ぶ。

だからランクの差異はあまり出ないはずなのだ。

自分が認めた存在であり、また自分の霊力と“主”の霊力がうまく噛み合う。

それが守護の関係を成立するための必要最低条件なのだから。

鈴堂新菜という存在は、守護霊制上の矛盾なのだ。

「僕が考えているのは2つあるんだ。

1つは彼女が『無転生』なんじゃないのか、ということ。

不安定な『無転生』なら霊力が一時的に上がることもあるからね。」

無転生、とは死んでも生まれ変わらない魂を持つ者のことだ。

無転生はいわゆる、魂の構造の不具合だから、魂自体の形が安定せずに、霊力も日によって増減する。

「……でも、無転生であればもっと力の変動が大きいのでは？

鈴堂新菜はCランク位で安定しております。」

よく気づいたね、と会長は手をたたく。

京子は表情ひとつ変えずに無言で続きを促した。

会長は苦笑して続ける。

「もうひとつ、考えられるのは故意的な力の抑制だね。」

会長は眼鏡を押し上げると、帥に目配せをした。

「（鈴堂新菜を要観察に指定しているのは知っておるか？）」

その視線を怪訝そうに見た京子とその靈魂、無花果^{いちじく}を諭すように帥が口を開く。

二人は静かに頷いた。

「（要観察、とは本来性格に問題がある者や裏切り行為が疑われる者につける。）」

もちろん、新菜はそのどちらでもない。

「新菜ちゃんは何者かによって靈力を封じ込められてしまった可能性がある。」

何者か。

浮かび上がるのは、何故か協会の活動を阻止しようとする2つの集団だった。

「巫女集団……」

「まだそうとは決まっていけないけどね。」

もしそうだとしても、黒い奴か白い奴かわからない。」

「だから鈴堂新菜が危険な目にあえば敵が見える、と。」

京子の質問に、会長は答えなかった。

ただニコニコ笑っているだけで、感情はつかめない。

「君は優秀だ。」

密くんとは違ってね。」

ぞくり。

背筋に悪寒が走る。

この人はやはり、冷たい。

それでも京子は無理矢理にも笑みをつくるのだ。

「おまかせ下さい。」

「新菜ちゃんの要監察レベルを2段階上げる。」

「要監察レベル3、ですか？」

監察レベル3は「対象者に何があっても監察だけ続ける」。

これで任務中の新菜がもし危険な目にあっても、協会は助けられないことになった。

やりすぎでは。

京子は会長を敬愛しているが、今回はいつも以上だと思う。

「鈴堂…」

彼女は何者なのだろうか。

肩口で髪を揺らしながら軽やかに協会を出ていく人物を見つめながら、京子はぐっと拳を握りしめた。

幕間 終

幕間 あの子（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました！

お気づきの点があれば、指摘してくださいと嬉しいです。

2話目も頑張りますので、よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2122y/>

靈魂！

2011年11月24日16時52分発行